61

11

が

分、 近 )頃金 の要るようなことはあ りませ ん

ラ 押詰 ッ のです。 ったある 五郎 Í が、 銭形平次のところ いきなり長い顎を撫でながら、 ^ ッ ソ リとや こんなことを つ て来たガ

何だと? 八 言う

ました。

平次は自分の耳を疑うような調子で、 長火鉢に埋 つ た顔をあげ

実はね、 ッ ヘ 親分。 ッ、 ^ 思 ッ いも寄らぬ大金が転がり込んだんで」 ^ ッ、 そう改まって訊かれると極りが 悪 4 が

ちゃならねえと、あれほどやかましく言って居るじゃな 大きな事を言やがる。 お 上 0 御用を承わる者が、 手弄な 4

博奕なんかで儲けた金じゃありませんよ、 ラ は唇を尖らせて、 大きく手を振りま 飛んでもな した。

「それじゃ 富 と み く じ か、 無尽か、 まさか拾ったんじゃ あ るま e s

な

そ

んな気

のきか

な

11

金

Þ

あ

りませんよ、

全

商

法

け

— 何 ? 商 法? 手前え が か 11

ね、 親分、 しちゃ 安 11 け い地所でもありません ま せ こう 見え か、 算盤 少 買 つ は て置

鹿 野郎、 二朱や 一分 で江 戸 0 地所 が 買えると思 つ て 4 日か

が 近 朱 11 か P ら、 分 なら、 少 は 親 わ ざわ 分も喜 ざ ば 親 分 てや 0 耳 に りてえ は 入 れ ません

「何だと?」

え 気<sup>き</sup> 江 戸 青息 怒 つ 息き だ ち っ子 か で だ。 ら、 11 け 暮 不 ま 断 せ が 近く は ん 滅法 ょ な ると、 威勢が ね 親 分 力 11 ラ 11 だら が 銭 形 宵は 0 が 越ご 親 ね 分 0 銭を え。 は 交ů さぞ 持 ŋ ち つ 今 け 9 頃 け は ね

さね え か 八。 言 11 当 て ら れ て 向 つ 腹 を立 て る わ け Þ ね え

が 面らを マ ジ 7 ジ と見な が ら、 何 て エ言 W 草 だし

ほ ど、 ガラ 呆気は ッ 八 に 取 0 調 5 子 れ は、 て、 腹を立 ヌケ ヌケ て として る 張 合 居 11 bŋ ま あ り ŧ た せ ん そ れ

根 穴 0 あ 11 た 0 を 用立てた が、 今 日 0 は ピ 力 と来ま

ぜ。親分、この通り」

そう言 () な が 5 ガ ラ ッ 八 は 内 懐 か ら抜 11 た 野ゃ 暮ぼ な 財 布 ·を ぎゃく

中 か 5 ゾ 口 IJ ع 出 た 0 は 小 判 が 七 枚 に 小 粒

銭取交ぜて一と掴みほど。

郎 何 処 か ら ح れ を持 って 来 Þ が つ た

平 次は 矢 庭 に 中 腰 に なると、 長 火 鉢 越 しに ガ ラ ッ 八 0 を

ギューッと押えたのです。

親 分、 苦 11 手荒なことをし 5 Þ 4 け ね え

何を 0 野 郎 ッ 何 処で 盗 ん で 来や が 9 真 つ 直す 白

しやがれッ」

ん の拳に だは情 は け ねえ、 半 分 親 冗 分、 談 に ح して 11 つは Ŕ 間違 グ イ 11 グ もなく商法で儲けた 1 と力が 入 り

ですよ」

岡 ガ ラ つ 引に商法があ ッ八は 大袈裟に後手を突いて、 ってたまるも のか。 こう弁解をつづけ 盗んだんでなきゃ ました。 何処

から持 って来た。 さア言えッ」

うよ、 言 いますよ、 -|言わなくてどうするも 0 で す

おう痛 てえ、 喉仏がピリピリするじゃありませんか」のどぼとけ

の二つや三つ 口 1 ズにしたって構うことはねえ。 さア言え」

たなア、 持ちつけ ねえ金を持つと、 喉仏に祟るとはのどほとけたた 知

った

無駄はも う 沢 山 だ。 金 を何 処か 5 出 した、 それを早 ブ チまけ

7

取 得 平次が躍起となる のガラッ 八が、 万々 0 P 無 理 その のな 頃 いことでした。 0 岡 つ引の習慣 正直 に引摺 と馬 り込 鹿 力 ま を

れ う っか り役得でも稼ぐ気にな つ たら、 貧乏と片意 地を

にして来た、平次の顔は一ぺんに潰れることでしょ う。

「親分、 心配するのも無理はねえが、 これは筋の悪 金じ Þ ŋ

ませ 実は 親 分も 知 つ て居なさるあっ 望み手

あって売ったんで」

何? 手が対え の脇差を売 った?」

エ の暮、 柳 原 の古道具屋を冷 か ね て 買 つ あ

の脇差が、 十両になるとは思わ な か つ たで しょう」

ガ ラ ッ八の鼻は蠢 めきます。

で つ て、 ひどく腐 つ て 居た あ 0 脇 が + 両

なっ いう の

その通 りですよ、 親 分。 あ 0 脇差を見た人が あ つ て、 恐ろ

だ び て つ 話 居 た でさ」 る上 ら 俺 に 無銘だが、 0 ( ) うことに 彦 /四郎貞宗 て、 に間違 現 金 + e s 声 はなな で買うが e s もし間違

フ 厶

11

う

ねえ。 ん 売 H 待 本 で つ 役 つ 当 て そ な に立た て 大 は は は は は う 貰 貞宗 11 上 つ け H そ て だ な 本 だ e st つ e s た 代物 知 つ は り合 日 0 は備前物の合いの と言うんで、 大なまく だ。 望み手があるなら、 で、 十 刀 5 両 屋を二三軒当って だ 彦四郎でも藤 で売 思 か 5 11 つ ち 切 鍋な つ Þ 大変に損べ て手離 0 尻を 四 拵えごと 郎 見ると でも しま 引 だ つ 掻 あ か る 5 両で 筈 は 飛

か 呆ぁ つ た れ 返 か つ た 野 郎 だ 手 前 はそ の 刀 屋 0 鑑定 を、 相 手 に わ な

ح う 斯うだ」 態 せ ま か つ か ね たよ。 え 見込 彦四郎貞宗でなき ん 念入 だ 品 ŋ だ か ら 十 を か 両 け Þ が て 言 + 師 つ 両 匠 て 0 p で P Ŧi. つ 買 郎 た 入道 が つ て 置 正 相 だ は 少

ね 親 分。 ん な正 直な商法 は

な

11

で

5 う 何 生 が ラ 取 な 7 ッ 初 う あ は悉く 役 えず親 め ったら ことごと て 入 立 った 分 11 地 るよう 11 に 心持 + 所を買うとか、 見て貰 両 でした。 な 0 金 П う だ。 は つも あ 七 ŋ り 人 で 費 八枚 ませ 家を建てるとか で持っ の ん 小判を畳 か、 つ 7 ちゃ 来ましたよ。 親 · 冥利 り 分 の 差当 上 が 悪 ^ 並 *( )* ね、



たり、 止 重ねたり、 れ 俺はその音を聞 チャリンと叩 くと虫が起きるよ」 11 て見たりするのです。

ッ、 負惜みが強 いね、 親分」

馬鹿な野郎だ。 八両や十両で、 江 尸 の 真ん中に家が 建つ気で居

やがる

「家なん か 建たなくたって構やしませんよ。 これだけ あり 福る

餅を買っても、ずいぶんタホラ 出がありますぜ」

「呆れて物が言えねえ、

知 つ 手前の脇差を十両で買うのは少し変じゃ 八。 か

だがな、

見す見す大

ナマ

クラと

待ってくれ、 -こいつは少し臭いぞ」 跛馬だって買いますよ」

変じゃあ

りませんよ。

気に入りゃ、

違って、 銭形平次はもういちど長火鉢に顔を埋 こいつは何うやら思案の仕甲斐がありそうです。 めました。 暮 0 それを り 繰り

©2017 萩 柚月

錨床

の親方は、

11 か

真似するともなく、 八 五 立郎も高 々と腕を拱きました。

畳の 並 べた七 枚 0 判 何 となく引込みの つ か な 姿

近頃何か変なことがあ りや な か つ た

平次は改 め てこう訊きました。

「変な事?」

「例えば、 手前 が 嗅ぎ出 した犯人とか、 腑ふ に落ちな と思 つ た事

ありませんよ」

何かの証拠を握るとか

に P 握りゃ しません

ガラ ッ八はあまりに も屈託のない e s 顔です。

「そんな筈はな *( y* が、 待てよ、 そ 手前 か ら脇差を買 つ た 0

は誰 だ

浜 町 の吉三郎 遊び人で」

吉三郎なら知って いる。 賭事もしなかけごと い様子だが、 妙 K 金 廻 り

野郎だ、 ――その吉三郎と何処で知合になっ た

髪結 保定で、 あっしとちょうど互先という碁ですよ」

手前、 浜町まで顔を剃りに行くの の錨床まで来るんで、 かい」

方の いえ、吉三郎 剃刀がたまらねえって」 の野郎が町 髷はうまいが、 内 剃刀は下手じゃな

何だ、

拾

った

b

のをそ

0

まま腰

^

ブラ下げ

て

居

た

0

か

*€* √

つ しもそう思うん で すが ね

ろで、 吉三郎 は 何 手前 に 頼 み は な か つ た

いえ」

し変だな、 八。 腸きざし を売 つ た 時 何 か 言 つ た筈だ ع 思う

平 次 0 間 e st は次第 に核心 に 触 れ て 行きま す

いま たよ、 あ、 つい 草 れ 0 根附を見て、 そ 11 は

つ いから、 脇差と 11 つ 譲ず つ

の アナ 形 彫

「 ど う せ浜 町 河岸で拾 つ た 品 だ か 5, 脇 差 お まけ に け

浜町 で拾 つ た?

ヘエ

うく水 釣に行 炭俵と米 を見 た。 ガラ そ に落ちそうに ていると、 った ッ 俵を二十五六俵陸 のとき自分 帰 0 り、 話 は 白 少 足元の石 引 の船 明 の掛 け つ ょ て居 垣 の浜 って居た』 ^ り一と足先に岸へ漕ぎ寄せた伝馬が、 の上に、 揚げて、 ります。 町 河岸に船を着けたことがあ 牙彫の円いものが一 サッサと大川を漕ぎ戻った というのです。 一と月ば りま 夜ょ

あ りますが 間 0 つ 首と、 に 灰 は 技 さ て を、 見ると。 んで歩 彫刻は怪奇を極 それ 気き から得体 ちょ な W て ガ うど手 居た ラ ッ の 八 の め て、 は、 で 知 頃な根附で、 した。 れ な 自 唐草模樣と鬼 分 文字がべ 煙草入 真中に穴まであ のような縮 ター 附 面 け に つ 7

次も少し呆 れまし たが、 今 に 始 め ぬ ガ ラ 、ツ八の暢気のの人 気さが、 腹

を立てるに 7 Ŕ 少 馬鹿 馬 鹿 か つ た 0 で す。

九拝 どうせ て 持 馬 0 つ 骨 て か牛 行 つ た 0 が、 骨 に細 あ ん 工を なも したも 0 が 何 0 ですよ。 か に な り ます 吉三 か、 郎 は三拝 親

「呆れた野郎だ」

平次は誰へともなくこう言いました。

な 事 が 商 法 に なるなら、 江 戸 中 の 古 道具屋を漁 つ て 安物

脇 をう  $\lambda$ ح 買 11 集めようか と思う が ど ん なも

て 牙ゖ 加 減 根 に 附 しな だ つ たかも知 (J か、 八。 れ 吉三郎の ないな 狙 つ -とにかく、 たの は、 が弱し 両 0 な 金 を

持 つ 行 つ て、 脇差と根附けを買 11 戻 て来るが 11

「三日も前のことですよ、親分」

日 前 だ つ て、 三年前だ つ て 11 Þ な 11 か

両 0 金 が 三日も あ つ 手 に 無事 で 居 る わ け は な 61

りませんか」

様 0 ねえ 野 郎 だ、 11 ら 費 つ た 6 だし

米屋 酒 屋 0 払 61 煙草 を つと 大福餅を十 六文買 つ て、

一両二分と六十八文」

刻き みや が った な、 お 両 二分と六十 八 文、 お 前 0

ところにないか」

平次はお勝手の方へ声を掛けます。

お前 さ そんな事を言 ったっ て

声 は П 中 K 消えまし た。 差さ 迫ま る 大ぉ 時代の日か を え

大世話場の真最中だったのです。

気 のき か ねえ事を言うな、 何 0 た め に |質屋 が 暖簾ん を 掛け て 置

俺 の着換をそっくり持 って行きゃ

でも、 あ <u>خ</u> <u>=</u> 一日で年始に 廻も り じ Þ ありませ

「この正月は風ゕ 邪を引くことにするよ」

お静は黙って出て行った様子でした。

「済まねえ、親分」

ガラ ノッ八は萎い れ返 つ て、 平 手 で 額を叩 ( ) て居 ります。

i s つは罠だ ったのさ、 八。 ح れ から も気をつけることだ、

お静のことなんか心配することがあるものか、

こちと

らの女房は、 貧乏や十手には馴 れ っこだよ」

なアに、

次はそう言 ってカラカラと笑う のでした。

=

「た、大変だ、親分」

「また大変 の大安売が来やが った、 何だい、

た筈 0) 両 五 纏と 郎が、半刻も経たな め た 金を握 って、 浜 いうちに、 町 0 吉三郎 面食った旋風 0 ところ け 0 ように

舞い戻って来たのでした。

つ は 驚くぜ、 親分。 吉三 郎 が ゆ う 死 んだん

「何 ? \_

平次もさすがに立ち上がりました

「下手人は鉄砲汁

3

「河豚の毒にやられたのか

大きな失望が 平次の顔をサ ッ と繋げ らせます。

夜明 では 友達が三人で河豚鍋を突っつきながら、 け 前 に息を引取 つ たが そ の晩吉三郎が毒に つ たと いうことですよ」 中 って、 杯やらか 七転八倒 しているま の苦しみ、

「あとの二人は何うした」

「無事だったそうで」

「誰と誰だ」

「そいつは聞かなかった」

行 つ てみよう、 八。 どう も俺 に は 腑ふ に落 ちな い事 だ ら

平次 は 帯を締め直 して、 草履を突っ かけました。

河 で 死 ん だと解 つ ても -ですか į, 親分」

河 だ つ て 4 ろ 41 ろあるよ。 後学 0 ためだ、 緒に 来る が

人はそ のまま、 浜町 の吉三郎の家へ飛んだことは言う迄もあ

りません。

姿を隠 ラ ま が 吉三 ッ つ 何となく粋好みでした。 て居る 郎 してしまいます。 0 姿を見ると、 0 派 の い手な生活に は、 ほん 妙 に の近所の 似ず、 に掛り合 附合いがあまりなかった 家は至 人達が二三人。 いを 惧<sup>ぉ</sup>ぇ つ れるように、 て 地 味 で それ 贅 b $\boldsymbol{b}$ 沢 コ 平 0 で 次 か は コ とガ あ 集

飛んだことだったな、お神さん」

銭 形 0 親 分さん。 飛 ん だこと な つ 7 ま 11 ま

な 女房 様 子 0 で、 お 点。 逆 さ 解 び よ 二十五六 風ぶ 0 中に の良 泣き崩げ *( )* 年増 が、 れ て居る 顔を挙げることさえ の で した。

「ゆうべの客は誰と誰だい」

それ 次は が 形 ば ょ か ŋ わ 0 かりません」 線香をあげ て か 5 こう静 か 訊きまし

はて?」

「ちょいちょい見かけるお顔ですが――

「年の頃は」

「二十七八と五十二三」

「河豚は何処から買ったんだ」

今 日 漁 年を取 ったば った方のお客が持って来ました。 か りのを、知合からわけて貰っ 竹 の皮包みに て来たが、 よく洗 9

てあるから大丈夫だ――と言って」

「確かに三人で食ったのだね」

「それはもう間違 e st もありません、 大層お ( ) ( ) か 5, 私 にも

非とすすめましたが 私は河豚と雲丹 は 我 人慢にも 11 けません」

「二人の客が帰 ってから、 毒が利き始 め た 0

え

「河豚 0 り が あ るだろう、 生ま でも 煮に た の で b わ ね チ  $\exists$ 

と見せて貰おうか」

平次は妙に執拗に突っ込みます。

そ つ た 0 皆 んな竹 0 皮 に 包ん で持 つ

しまいました」

「吉三郎は河豚をちょ いちょ いやるの か € √

生 れ て初 めてだそうで、 ひどく嫌が つ て居りま

始めると、 二人に笑わ れて我慢に食べたようです。 こりゃ 飛んだうまいや、 鮟鱇そ でも、 っくりだ 一と箸二た箸食い そんな

事を言ってました」

「鮟鱇そっくりと言ったのかい」

それから酒 0 味がどうも変だ、 舌 0 せ e s か らとも言 つ て 11

女房 のお 由 は進まな e st 様子な がら、 間 わ るるままに説 明

た。

「三人で一つ鍋を突っ ついたのだろうな」

「え、それなのに、 中た ったのが一人は情けな *( )* じゃありませ ん

「二人が無事とどうしてわかった」

御近 「何処で噂を聞いたか、 所 衆も御存じですが、 今朝お二人はあわてて飛ん 何か宿が預 か ったも の で来ました。 があるとか

言って、 仏樣 の懐までかき廻して行きましたが

「それが見付か ったのかい」

「そこまでは解 りません」

話が次第にこんがらかって、 そして 微妙にな つ て行きます。

おや? この 脇差ですよ、 親分」

ました。言うまでもなく三日前にガラ ガラッ八は死骸 の 枕元に置 ( ) てあ つ ッ八が た、 魔‡ 除ょ 吉三郎 け 0 に売 脇 差 つ を た、 取上げ

両 の赤鰯丸です。

「そいつに は大した用事が な か つ た ん だよ。 ところでお 神さん、

毒は何刻ほど経って利き始めたんだ」

出ると、 「鍋が空になると、二人のお客はすぐ 上り框が で引ッくり 返った切り 帰りました。 そ れを送 って

やはり身体が痺れたんだね」

お 由の声が涙に途切れるのを、 平次は慰め顔に言うの でした。

痺れもどうもしません。

急に

腹

0

中

^

火が付

( )

たようだ

と言 つて、 目も当てられない苦しみをしましたが、 とうとう黒血

鉄砲汁 を 吐は ( ) て夜明け前に息を引取りました」

61

男だそうですよ」

「医者は?」

れ る 町 お 居 由はこれだ ります。 吉三郎 玄道さんに診 け言 0 死 骸 う ても の が 噛 精 ら み 11 11 ま つ つ ぱ したが。 ように、 11 でした。 何 時 の 役 平 々 は声を立て 次 0 も立ちませ 間 11 が途 て泣 切

四

親 吉三郎 分、 河ふ 0 家を 豚になる 出ると、 じゃ十 手 捕 ガ 縄 ラ ッ に も及ば は P う天下泰平 な いじ りま 顔 せ に な つ て 11

「手前はそう思うのか」

る

0

で

した。

「だって親分」

だ か ら幾年経 っても、 大物は挙がらねえ の さ

銭 形 平次は八五郎 の鈍骨を愍むともなく、 こう言う の でした。

エ すると、 何か変なことでもあるんで?」

人相を訊 辺 に 居る く が **H**J 41 内 · 1 0 その辺が手繰りどころだ」 人達に、 今朝吉三郎 0 家へ 来た、

「~エー

ガ ラ ッ は 吉三郎 0 家 0 裏 П ^ 廻 ŋ ŧ た が、 Þ が

ままれたような顔を て戻 つ て 来ました。

「どうした、八?」

て行 すぜ、 ったのは、三十 親 分。 今 -前後の凄 朝 P 11 年増と、 つ 来 四 仏 恰 好 浪 で 人者ら か

それ見る が *( y* 11

古三 郎 夫妻と は 余 つ 程 上記 懇 の様子 で、 時 々 ح の 家 ^ 来るそうで

すよ」

所、 名前 は

「そい つ は 解 5 ねえ、 お 由を締 め上げてみま

無駄だよ 11 か に 止すがい 御用 で も寝れざ *( )* 0 それ め に がよく 亭主 ねえ」 の死骸 0 側で手荒なことを

親 分 は 相 変らず弱 気だ」

「それ で ( ) のさ、 気が強くて考えが 浅か つ た H に ゃ 岡 つ 引 は

罪 ば か り作 るよ」

平 次はそ んな事を言 e s な が 5, 町 内 0 本 道、 町 野 玄道 を ね ま

吉三郎毒死 の 頭末を細々と訊

分、 あ れ は どうも腑に落ちない ょ、 河ふ 豚ぐ 0 毒 ば か ŋ は

か つ たようだ

すると、 何か 外 0 毒 でも盛ら れた様子で ?

そう言 う わ け じ Þ な 11 南蠻物なら あんな激 e s 毒 薬 は 江 戸

中 0 生薬屋を捜 た つ てな i, 知らな

南蠻 物 ?

らな ŋ いう 河 豚 0 に は、 て 河豚 置 0 外 は に あ は るま な 4 いことだ。 0  $\equiv$ 人 で 食 つ 7 中 0

大きな 坊主 頭を振 る ば か ŋ で す

入

e st

たなら、

三人が三人と

b

Þ

5

れる筈だ」

は もう白 次とガラ ( ) 眼を見せるだけで、 ッ 八は もう 一度吉三郎 二人 0 0 家 間 ^ 11 戻 に もろく りま た。 に答えて が、 は お 由

れず、 親類緑者も、 友達もない様子で、 話を手ぐり出す工夫もあ

りませ お神さん も う 一 つニ つ訊きた e s が お前さんところ の 宗旨 は

何だえ

平次は つ か ぬ 事をきく の で

門徒ですよ、 今お寺様が来ますから、 お宗旨の事ならそっ ち

訊 て下さ **€** √

剣 もほろろです。

江戸に は 親類もな いん

あ つ た つ て遠 ( ) 身寄は音信不通で、 附 合 っちゃくれません。 尤

も長 は . 亭 主 弟 が 居ますが お葬式に 間に合うわけはな

そ つは 気 の毒だ」

11

という

外に

何

の変ったところもなかった

裕ら 福 そんな 事を言 いながら、 は、 家の中を念入りに見ましたが、 のです。 ひどく

「吉三郎は 遊び人で通 っていたが、勝負事は好きじゃなかったそ

うだ。 立入 ったことを訊くが、 世過ぎは何でや って居たんだ」

平 次 間 11 は かな り突っ 込みます。

私にも解 りませんよ。 金 の成る木でも持って居たんでしょう」

お 自は空嘯 いて相手にしそうもありません。

う つ、 三日 前 に八 Ŧi. 郎 が ح の脇差と牙彫 0 根別は を

両で吉三郎に売 ったそうだ。 少しわけがあって、 そ れを返して

貰 いん だが

両 0 金を お 由 0 前 に 押 しや つ て、 相 手 0 出 ようを 待ち

ました

勝手にそ 0 脇差を持って 行 って下さ e s 0 尤も牙彫 の根附な ん

か

は知りませんよ」

「確かに持っていた筈だが――

親分も、 仏 樣 0 懐 が見たい んでしょう。 勝手にするがい i s 馬

た 。お 由 け

鹿馬

鹿

は気が立 つ て 居 るら こう言 つ て プ 1 غ 座を立ちま

「見ましょうか、親分」

立ちかかる八五郎。

無駄だろう、今朝抜かれてしまったよ、 赤が が鰯丸ないがいわしまる ん か持 つ

行 つ ても仕様があるまい、 十両の金さえ返 ゃ気が済む。 さ

**ア帰ろうか、八」** 

平次はもう何 :の未 \*\*\* 気が なく立ち上がるのでした。

五

講 ガ に は、 中 ラ そ が ッ の 来た 何 八 日 半日、 は の変りもありません。 のと、 吉三郎 平次はどこともなく飛んで行 お通夜の小坊主が、 の 家を宵まで見張 りましたが、 お義理だけの経をあげた外 ってしま 町内 の百万遍 いました。

ラ り と 平 次 家 へ来た の は 亥ょ 刻っ 少 過 食わず 飲まずで見

張っていてひどく疲れて居ります。

「親分は?」

長 火鉢 冊の蟠りない記げ ゎヒヒカッタ ませんト の前に 類杖を突きました。 調子に、 入 9 八五 待 郎 つ は て 11 P 下 さ のように 11 な ヌ 八 さ と入 って

何 処 廻 つ たろうな

お 支度 は さん

お静 は それ 構 わず、 腹 0 減 つ て e st るらし 11 Ŧi. 郎 の 顔を、 少

遠 から 鑑定 てお り ´ます。

親 が 帰 つ て か 5 御 馳 走 に な ŋ ま う

ガ ラ ッ 八 にも矢張 り遠慮はあ つ た の です。

せめて一本燗けましょう

エ、 変なことがあ つ たもので

まア、 八 、さん、 たまにはお酒くらい は ありますよ。 升 Ÿ イ先 届

刻、 八丁 堀 の旦那から、 心 祝 いがあるからと、 わざわざ

て下 さ ま たよ」

そ つは豪儀だ、 さす が に笹 野 0 旦 那 は 気 が 付く

ッ

郎 は す つ か ŋ 好を 崩ず て しま e s ま す。

据えた て お っ の を 憚: は 膳 そ お 静 0 0 間 上 か で すが、 K たのでしょ そ 銅g 壺 さ つ ع す に 穾 載の が う。 に せ つ込 夫 て Þ 6 りま 留 だ徳利を拭 した。 子 元は (J 分 て、 水茶屋 酒 八 かかま Ŧi. 郎 奉公 の前

済みませ ん

て

つ

ア 此 方 が 勝 手 な ん 有難 えな。 Ļ 散

す散 り ますと来やが る。 ^ ッ、 ッ 良 色をして e s る

ッ 喉を鳴 ら ながら、 猪ャ 口こ 手を胸 のあ た りまで持 つ て

行 **H**. 郎。

な

八

ガ ラリと格子 が開きました。 銭形平次が 帰 つ て 来た の で す。

ッ

け

を膳 へおく かと思 った八五 郎 の手は、 意地汚くそ のまま唇 ^

あ ッ

ッ ع <u>F</u>. 郎 胸 か 0 手 5 を 膝 ハ ^ タと 飛 散 打 る つ た 平  $\boldsymbol{b}$ 次 0 が 煙草入 ありま が す 飛 0 盃 ん は で 来 後 た ろ 0 飛 で ん た。 で、

親

八五 郎 0 声 に Ъ 怒かり が あ ります

鹿 ッ そ 11 つを呑っ むと命が ねえぞ」

言 そん ら、 明 俺 一今路地 は 堀 つ H 様子を見て な つ 0 居なすっ お話 旦 先 那 の 先刻まで、 代 外まで帰れ の出な が、 様 たよ」 ίĮ 法要で、 心 るうちに、 11 祝 わけ 八丁堀に居たんだから、 つ ( ) て に いはねえ。 来ると、 酒を下すったなんて、 牛込の お静 お寺まで行かなきゃ の話を聞 心祝いどころか、 変な野郎がウ いてしまったよ、 お酒を下さるなら、 口 そい ウ 笹野 口 つは大嘘 な して居るか ら 0 旦那は

お 静 そ う言 の差 出 ( ) なが す /樽を受取 ら平次は、 って 埃<sup>ほこり</sup> 眺 め ま 吅 かずに 入 ŋ 込ん で、 黙 つ た

親 分 そ、 そ ( ) つ は本当ですかえ

は、 が 嘘だ この つ た H のいるし 町内 に Þ で 判 酒 俺 は るだろう」 屋 八 0 だ。 に申訳がねえこ 八 堀 か 屆 とに 11 な る。 ので は れ 見

郎 P そ う言 わ れ る П P きけま せん

身代 ( ) ところだ。 り 皿 ^ ど を 吐<sup>は</sup> 八、 そ 11 11 つ 7 を 死 ぬ と猪口 ところよ」 吞 6 だ だけで、 手前え は 俺

だ が 癪にさわ る 野郎 Þ な *( )* か 0 平 ・次を鰌と 間違えや

がって」

「誰がこんな事をしたんで、親分」

五郎 は ようや 人心地が つきまし

「吉三郎を殺した奴だよ」

「じゃ河豚?」

馬 鹿 河 豚 が 酒 を 買 つ て 届 け る

「さア解らねえ」

難 俺も解 儀 らねえ お 上 0 御ご が . 威い 光ラ 11 つ 拘かか 大変な わ る。 。 曲 来 者だ。。 11 八。 退治 晚 しなきゃ のうち 御府 を

あけてやる」

ヘエ

八 Ŧī. 郎 は 平 次 0 剣 幕 5 れ て 七 ソ 七 ソ 立上 が ŋ ま

お 静 その 酒 は 匂 11 を 嗅<sup>か</sup> 11 でもならねえよ。 封印をして大事に

しまって置け」

ハイ

言 4 捨 てた平次。 そ の足で駆 け 付け た 0 は、 町 内 0 ・酒屋升定 で

した。番頭に訊くと、

11 11 年 増 で たよ。 番 良 11 0 を 升 量はか ら せ 小

7 りま うと言うと、 イ ヤ そ れ は 及ばない、 私 が つ 7

行かなきゃ、親切が届かないって」

その女は三十前後の――」

は 大岩がだな わ か り 0 ませ 御 新造  $\lambda$ が ح つ た 風 でした。 頭 小かを冠が つ て 居るの 髪形

「有難う、飛んだ手数だった」

ました。 平 次は 外 見えざる敵 ^ 出 ると、 0 真 したたかさを改めて犇々 つ 一暗な師走 の 空を仰 W で、 と感じた様子です。 大きく 息を

## 六

ねえ、 お神さん、 立派に毒 そ 害がい 4 さ つは れ 間違 た 6 だし いだぜ。 吉三郎は河豚 で死 んだん Þ

0 死骸を中に、 通夜 の人数を追っ お 由 .と膝詰 払 って 、八五 め 談 判を始 郎 に 見張 め た 0 らせた平次 で した。 は 吉三郎

「まさか、親分」

お由は容易に信じそうもありません。

鱇を持 死 ع な が ぬ 証 11 気遣 な は って来て、 11 鍋な で ( ) いくらでもある。第一、 はな だ、 はな 吉三郎が 11 11 が 河豚ということにして食わせたんだ。 `` 河豚なら随分三人のうち一 彼 河豚を食ったことがな 奴らは其処を狙 昨夜三人で食っ ったんだ」 いと言う た 人死 のは、 ぬ 河ふ 鮟 か 鱇 5 豚ぐ うこ 鍋で じ 鮟 Þ

だが、 ては面 た 残った のは 南蠻渡 そんな 白 魚 を竹 な 事 ŋ 11 が か 0 0 らだ。 なく 毒薬に違 皮包にし て、 そ 腹 れ て持 11 0) か な 中が ら、 つ 11 て帰 焼け爛たた 河 玄道さんもそう言 豚 つ た 0 毒 のは、 れるようで、 なら身体 後 で 鮟鱇 が つ 痺び 血 7 を吐 れ ع いる」 判 筈 9

た 時 毒は、 か何 か、 吉三郎の 投げ込まれたんだろう。 盃 0 中に入って 居たんだ。 その証拠は、 多分、 ちょ 昨 夜は三人 (J と立 つ

たんだ」

盃 のや り 取 りは な か った筈だ」

する のが、 ッ、 そ、 ゆう そ べ 0 は 通 最 り 初 ですよ か ら 御 家人喜六 親 分。 11 の言 つ b差 11 出 た しで、 り差 盃 さ れ 0 P た ŋ ŋ

取 り な し、 う、 ん、 食 つ て 飲 配れ P う 偶が と いうこ ع に たよう で た

年 増 に殺さ れ たんだ。 今 夜 は 俺 0 とこ ろ へま で毒 酒 を持込みや

そ

見る

が

11

11

お前

の

は、

そ

の

御

家

一喜六と、

b

う

が つ たよ。 放ぉ つ て お くと何をや り 出すか 解 らな 11

え ッ

解 つ たか ` お 神さん。 夫 0 敵 を討 つ気 は な 11 0 か

畜 生 ッ そうとは 知らずに、 庇がば 私は亭主に П 止 め さ れ た を

さ · 1 親 分さん 守

つ

て

今まであ

の二人を

つ

て

ば

か

ŋ

11

ま

敵

お 由 に bようや 全<sup>ぜ</sup>ん が 解 つ た 様 子 で す

そ に ても 相 手 解 ら な ち Þ 敵 討 ち が 11

あ 0 女 は 何 だ e s

お 勇 ح 11 う 大 変な 女です ょ

で 何 か Þ つ て 居 た筈だ が

何 か 仕 事 を て ( ) るようで した が、 私 は 言 つ てく れません」

な は 全 く 何 に P 知 5 な *( )* 様 子で た。

間 は た つ た三 人 切 り か

子 分 は二三十人あ る筈です」

ね お神さん。 仏様 のことを悪く言うわ け Þ な 11 が 吉三 郎

は そ 御 人喜六と唐 人お男に荷担 て大変なことをや 居

は

良

*( )* 

心

掛

だ

夫

0

罪亡ぼ

しにも

な

るだろう」

11 獄 う 俺 門 見当 何 で 磔り で は、 な 刑け ようだが もなる 多分抜荷を扱 ح 11 つ て 居た は 大変 の な だと思う、 御法度で 露る 荷 す

屑ず 贅 間 沢 自 品品 う 売 0 物 栄 り 付 を買 華 間 け 0 だ る 入 た れ 0 め だ に そ ` か ら、 紅う れを三倍 生手しん 抜 荷 に 扱 御  $\mathcal{F}$ 倍 玉 は の 利潤 潤 の宝から 商 を 人 で、 Þ 0 風 つ 金 て 持 に b Þ 厄 置 物 体 好 ね な 11

た だ か 方 玉 3 様 か お 5, お 大 玉 への舌は焔にのお 膝元 判 間 0 9 そ 物 宝 九 命 て 州 判 わ だ 知 0 持 抜け荷に 大ぉ ع 5 か 0 0 · 換<sup>ゕ</sup> 判しがはん ず 沖 5 つ 小判、 て来る あま で な で 0 日 て 紅 e s 行 毛 本 り つ 道 生 理だ あ た に 0 違 れ 南なん 活 は 船 0 だ。 を 蠻ん に 0 11 積み 足 羅ら 紅 秘ひ な 毛人 法は 紗や · 1 換か 長 現に Ź 崎 に だ 0 江戸 な 毒 0 は で で薬だ」 お 米 は ら 命 前 お ビ が Þ ぬ ^ は 0 炭 役 物 け 夫 諸 を で ۴ 0 持 欲 玉 荷 0 口 吉 込 目 だ 0 に 三郎 荷 交ぜ が 0 が ん で が Þ るそうだ を殺 集まる か 公

親 分 さ ん

平

次

ょ

う

に

燃

ええま

す

ては 置 け な た め 4 お 前 を 破 0 り、 知 9 そ 7 ることが 0 上 人 まで あ つ 殺 たら皆な言 す よう つ 者

許 お け な *( )* 奴 らだ

さ 皆 ん な 申 げ ます

仏 は 何 W 10 P 知 り ませ ん でも、 船 0 入 る時 0 合いず だ け は

知 つ て います。 -ときどき見張りをさせられましたから」

「有難い、それが解りゃ」

お由は声を潜めました。

七

そ 晚 神 田 の 平次 の 家は 焼けた のです。

その の計略は 長屋を焼き落し、 0 でした。 これば 夜 は 見事 ∄\* か 立刻半頃、 りは、 に見破りましたが、それだけで油断をして 銭形平次も気が付かなかったのでしょう。 近所の二三軒を半焼にして、ようやく納まった 三方からあが った火の手は、 瞬く間に平次またた いると、 毒酒

それ だ のは不幸中の幸いでしたが、困 風 が つ 切り行方不知になってしまったことです。 e s の ۲, 暮 0 街で注意 が行届 ったことは、肝心の銭形平次が、 いた ので、 これ 丈<sup>だ</sup>け で済

―銭形の親分が焼け死んだとよ―

表裏の戸口は外から閉めてあったそうだ、 お静さん が 命 か

らがら逃げ出したというぜ――

が死ん て、 立っている、 そ 晒<sup>さらしも</sup> んな噂 綿で巻かれた、 ح いう が八方から飛びました。 気の抜けたようなガラ 0 P 満更の噂ば 痛々しいお静の様子を見ると、 ば か りでは ッ八の姿や、 全 く、 な 焼ゖ ( ) 跡と 様子 に 顔 から腕 シ で す。 3 銭 ン ボ 形 ^ 平次 か IJ け

61 昼 御用聞も、 頃 は八丁堀 五 人十 の与力笹野新三郎も来ました。 人と集まって来て、 夕方には、 江戸中の それが二三十 顔 0 良

になり、 打 ち 湿 ぬ った様子で、 ポッポと烟る灰を掻か せて居りま

す。

せて 日が , 暮れ 回向院に移しました。 7新三郎 いると、 平次 緒 に、 の遺骸を板 それに従っ 江戸中 囲がこ 0 つ e s 名あ たことは言う迄も 0 中 る か 御 ら 用聞手先が 運 び出 レ戸 あ 三三十 板 りませ 載の

そ の 晚 の戌刻半頃、 ح の 行 は 回向院 の寺 内に 入り、 そこでお

通夜が営まれたのです。

同 じ夜、子刻過ぎ、 永代のあたりから漕ぎ上がった伝馬が

浜 町 河 岸 に 来ると、 船頭が 舳も の灯を外して、 十文字に二度、

と振りました。

師走二十九日、 漆し のような闇 0 中に、 その 光が 水を 渡 つ て 走

٤, 何処か らともなく ·河 岸 に集まった人数がざ っと二十人ば か

変な時 船 が入ったものだね、お首領」

宵のうちに、 永代から合図があってび つ くり たよ、

ろ入る 船 は な 4 筈だが、 春にな ってから来ると いうのが、 何

都合で早く入ったんだろう」

そう言 った囁きが、 彼方、 此 方に交されます。

「それよ、板を渡してくれ」

「おい」

酒の荷が先か米の荷が先か

は 大ぉ 海の日か だ、 酒 荷を先に れ。 三河 屋 長 崎

来て居るぞ」

9 の間にやら、 屋号を入れた提灯が二 つ三つ用意されました。

り。

屈強な若者達が、 船 から運び出す荷を、 陸か に待っ て 居る人足が、

言葉 少な に 受取 つ て、 何 処ともなく姿を消 します。

残 つ 船 た 0 中 の は 0 荷物 頭巾を目深に冠っずまん 七八。 つ た男と女 その全部を運び終ると、 の二人でした。 後に

「これでよし、帰ろうか」

「帰りましょう」

歩みを移す二人の前へ――

「御用ッ」

ヌ ッ と突っ立 つ た の は 八 五郎 の ガラッ

一 何 ? 」

御家人喜六、唐人お勇、神妙にせい」

ッ 組 付 4 て 行 くガラ ッ お 勇は身をか わ 1 と肩

のあたりを突きました。

ワッ

二三歩泳 61 で立直るガラッ 八。 そ の後ろ か

えいッ」

御家人喜六の一刀が闇を劈くのを

「俺が相手だ、来いッ」

横 か 5 飛込 んだ + 手 が ガ ッ 丰 と受止 め ました。

「邪魔だッ」

抜け 荷に の悪 吉三郎殺しの下手人まで露顕 したぞ。 観念せい

「何をッ」

御 は お 勇を後 庇がば つ 刀 を 闍 に 構えます。

「御用ッ、御用ッ」

方 から、 ヒ タ ヒ タ を詰 め ょ る捕方 0 人

ッ、 寄るな寄るな、 人残らず切 つ て捨てるぞッ」

御家人喜六 0 腕 は 抜群でした た。

伝馬は 此 方で仕立 て た偽には だ、 仲 間 は 人残らず生 捕 5 れたぞ。

神 妙 に 縄を 頂 戴 せ

を 向 跟っ 院 つ たで けら 刻 通夜をすると見せっゃ れ、 船 ょ か 落着 **う**。 5 揚げ 先で縛られたとは、 た 荷 物 か けた、 を、 江 つ 戸中 つ 担かっ 御 0 手先 家人喜六も 11 で に 行 つ た まだ 人 子 残 分 らず後 知 は らな 回

ええ ッ 其方ども に 縛ば ら れる喜六 で は な e s 退 け退 け

方 は サ ッ ع 身を翻れ を 負 わ ずと、 れ た様 眼 子 にも 止まら ぬ 早業で、 早 も二三人 捕

断 する な ッ

さ

後ろか 5 激 励 0 声を掛け た 0 は笹 野新三郎 です。

灯だ が だ ッ

誰 Þ Ġ の 声に応 て、 どこに 隠 て あ つ た か + 幾 つ の 御 用 0

提 灯が 度に パ ッ と二人 の 曲 者を照 します。

つ が 行きま よ **う**。 野 郎 は 家を焼 か た た怨が あ

す

ッ と飛 出 た美丈夫。

平次だ 平 次

捕 物 陣 は二 つ に 割 れて、 その道を開きました。

生き た 0 か平次、 命冥加な奴だいのちみょうが

ŋ す る 御家 人喜六、 右手 の刃は、 油 断 な ラ IJ

ります

手前 のすることは 々 · 卑 怯 だ、 我 慢 0 な ら ねえ野郎だ」

そう言う口を塞ぐように、 喜六の刃はサ ッ と伸びます。

お つ と危 ねえ これでも食やが れ

平次の右手が挙がると、 夜風を剪って銭が 枚、 御家人喜六の

唇な

**ッ** ∟

僅 かに 刃の平で受けましたが、 枚 く目は強かい 頬骨 一枚 目

は 額 眼

郎 **ッ** ∟

ひるむ後ろから、 無手とガラッ八が組付 いて居たのです。

危ねえ、 八

形平次はおどろ 11 て 飛込みました。 喜六 の後に 11 る 唐人お 勇

は、 匕首を抜 いて、 ガラ ッ 八の 脇腹 お勇の匕首は飛龍 ヘサ ッ と突 いて出たの です。

0 胸 で来た 0 で した。 それをかわ

平次は

危うくそれを突飛ばすと、

女、 ( ) 加減に しろッ」

飛付 く平次。 そ 0 手を払って お 勇 の 身体 は、 大 Ш 0 寒水 水

音高 、飛込 んで ま いました。

X

X

変な 捕 物だっ た ね 親 分

帰 り 路、 柳 原 土 手 でガラ ッ 八 はこう 誘さ け ま

脇差を十 両に 一売った のが始ま りさ。 手 が え が 感 0 11 11 人間 吉

三郎 0 心持を読むと、 11 つは危な 11 ことだ つ た ょ

エ

は

面白

そうです。

まだ判らねえの か 手前に抜荷を揚げる現場を見られ たか

の如く平次

ら、 大なまくらを十両で買ってな、 手前の御機嫌を取ったのさ、

見て見ぬ振りをしてくれという謎さ」

なア

「今ごろ感心する奴が あるも 0) か、 十両 の元手をただ取られたよ

うなものだ」

ヘエ

「あの牙彫の根附は、一ヘエ――」 多分抜荷を受取る手形 のような b0) だろう。

吉三郎 は 仲間では三下だが、 あの牙彫 の手形を手前 のところか 5

見付けて持って行くと、 急に頭領の株を狙って、 抜荷の大儲 けを

人占めにしようという大望を起したのさ」

「それと気の付いた御家人喜六と唐人お勇が、 吉三郎如きに大事

の手形を取られちゃ 叶わないから、 鮟鱇を河豚と言って食わせ、

実は毒酒 で殺して死骸から牙彫 の手形を抜 いたのだよ」

「そう絵解きをして貰うと、そうでなかったら嘘見たいで、 ヘエ

ガラ ッ はまだ長 い顎を撫でて居

「だが、 自分達の利潤のために、 お上の御法を破る 奴は憎 e s ね。

ります。

その上仲間を殺したり、 俺の家まで焼いたり」

「そう言えば、 親 分は何 処へ行きなさる つもりで

お静は当分里 のお袋に預けたよ、 俺はな、 八。 当 分、 八 五 郎

の家に居候ときめたよ」

つ は 有難てえ。 親 分を 居候にお いたとあれば、 あっ、

身が広

ッ ハ ッ ハ ッ、 ハ ッ

ハ

ッ \_

瞬転毎に、幾百人かずつ最後の足掻きのゆぬないという。 幾百人かずつ最後の足掻きの坩堝の中に、眼を覚さの夜は白みかけて居りました。大晦日の江戸の街は、

して行くのでしょう。

(編注)

ます。 底本の 作品中には、 なる古典的な文学作品でもあり、 が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異 ままとしました。 身体 の障害や人権に ご理解、 ご諒承のほどをお願 かかわる、 著者が故人でもありますので、 差別的な語句や表現 い申し上げ

挿絵―萩 柚月

初出 「 オ ル讀物」 昭和十三年十二月号 文藝春秋社

底本 月三十日初版 「錢形平次捕物全集」 第四巻 河出書房 昭和三十一年六

編集・発行 銭形倶楽部



## 銭形倶楽部

http://www.zenigata.club/